

ジェフリー・ライス著

訳：伊藤雄志・箱根かおり・リッチーザイン

1918年のインフルエンザパンデミック

— ニュージーランドの経験から学ぶ

(春風社、2024年9月)

市川直子

2019年12月、中国で未知の感染症が発生すると、すぐ翌年には罹患者、重症者そして死者の数が世界規模で急増していった。各国政府は緊急事態宣言などを発令し、これまでとは異次元の対策をつぎつぎと打ち出していった。

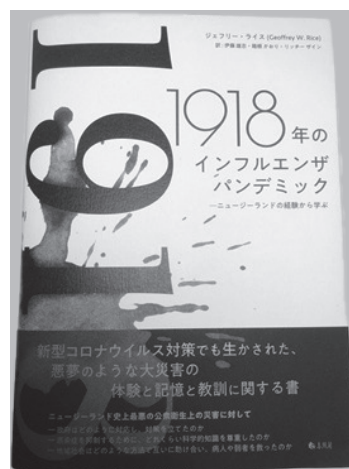
大学生活に目を向けてみると、感染拡大が始まった2020年度、各校はキャンパスを閉鎖し、講義のみならず演習もインターネット上で行っていった。このオンライン化は友人関係を含む人間関係を毀損していった。その顕在化に気づいた各校は翌年度、早くも対面授業を復活させ、学内における諸活動も再開させていった。

すでに5年が経過した現在、私たちがパンデミックについて改めて思惟し、記憶しておくべきことは何であろうか。それを考える素材を提供してくれるのが本書である。

ニュージーランドの歴史学者ライス氏は、1918年に起きたインフルエンザパンデミックの記録からなる大著を刊行していたが、一般の読者向けの小著も出版していた。本書はその一般書を日本語に翻訳したものである。主に3点で特徴があろう。

1点目は、外国で出版された専門書であることに関係する。これまでスペイン風邪については、アメリカの歴史学者の浩瀚な学術書が翻訳されていた⁽¹⁾。本書はそれにつぐ訳書であろう。興味深いことに、著者ライス氏は日本の歴史人口学者の速水氏の文献に目を通し、本文で日本の状況にも触れている⁽²⁾。速水氏の書籍は英訳されているが、このたびライス氏の著作も邦訳された。これにより、両国の市民はともに互いの取り組みを手軽に知ることができるようになった。読者の交流が始まるかもしれない。

本書はまた、翻訳本にありがちな生硬な文体ではなく、流れるような読みやすい日本語で書かれている。しかも、原書において著者は多くの住民の肉声を集め、親しみやすい写真やイラスト



ト、イメージしやすい地図を多く用い、当時の新聞記事、高齢者への聞き取り調査で小耳にはさんだ逸話、看護師や教師の回想録なども丁寧に取り込んでいる。まるで生活史のようなまとめ方であり、本書は往時を生きた人の温もりが感じられる作品になっている。生の語りによって、読者は約 100 年前の南半球に暮らす人々に思いを馳せることができるのである。

2 点目は、訳者の綴る序文にあるように、「1918 年のインフルエンザパンデミックを経験したニュージーランドが、その悪夢のような体験をどのように反省し、その後何を教訓として公衆衛生の改善をしていったのかを学」べることである。本書は近年のコロナ「ウイルスとの闘い、そして将来私たちが直面する世界の公衆衛生の問題について考える手掛かりとな」りそうなヒントが満載である。著者はもちろん先住民マオリへの配慮をした上で、往日の学校や石碑の数、鳥インフルエンザとの関係などにも注目し、そこに歴史家らしい深い洞察を加えている。ニュージーランド政府がこのインフルエンザパンデミックから引き出した教訓をコロナパンデミックの初期に活かし、世界中で注目されたことも想起されよう。

興味深い 3 点目は、本書が国家論になっていることである。序文に、「本書は近代世界史における大きな出来事がニュージーランドに与えた影響についての記録である」という長いタイトルが掲げられている。これを目にした読者は本書をパンデミック克服の手法を示すものであろうと予想する。そのため、最終章「研究と学んだ教訓」の最終節に「国民形成？」という疑問符つきの題名が付されていることに気づくと、ふと戸惑いを覚えることになる。

著者によれば、ニュージーランドがヴェルサイユ講和会議においてイギリス帝国の一部ではあるものの独自の国家として認められた後に、「戦争による損失ではなく、前例のない公衆衛生上の危機を通して互いに助け合うという広範囲な共通の経験によって」、ニュージーランド人の本質的な性格が出来上がった。その本質的な性格として認識される「勇気、実理性、他者への配慮、公正性、臨機の才、楽観主義、そして明るい気質」が、さらに「国民的な精神に」昇華されていった。この精神的な結合が国家を成立させる「国民」を形成していった。この詳細な証明は訳書では省かれているが、1918 年のパンデミックを壮大な建国史と連結させている点で、本書は社会科学の観点からもきわめて示唆に富む書物になっている。

しかも、著者は「地域社会が団結し、人々がお互いに助け合ったこと」、そして「お互いを支える援助と気遣い」に「最も感銘を受けた」と評している。パンデミックにより人間関係が毀損されるのではなく、むしろ構築されていった。このような評価は日本⁽³⁾、そして学内では、あまり見かけない。この違いを記憶し、さらなる思考を巡らせていくことが大切であろう。

《注》

- (1) アルフレッド・W・クロスビー『史上最悪のインフルエンザ——忘れられたパンデミック』みすず書房 (2004 年)。
- (2) 速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ——人類とウイルスの第一次世界大戦——』藤原書店 (2006 年)。参考文献には英訳された書籍が掲載されている。
- (3) 磯田道史『感染症の日本史』文藝春秋 (2020 年)。